



## 現代女性の根本問題

菅 支那子

“Being a woman was never easy. But being a woman to-day is in many ways an ordeal than ever.”

現代文明の重要な問題中、未だ解決されていぬ問題、誰にとつても深い関係があり、少なくとも罪悪、貧困、離婚、失業、伝染病等々に匹敵する問題の一つは恐らく女性の問題であろう。女性は個人としてばかりでなく、社会機構の中で特殊の機能を持つ独特の集団としても、一つの問題である。婦人は全体として自分にも、子供や家族にも、又社会にも、問題である。「女性であることは決してなま易しいことではなかつた。しかし今日、女性であることは多くの意味でもつと苦しい試練である。」

女性は職業に就くべきであらうか。或いは家庭生活に集注すべきであらうか。結婚すれば子供を持つべきであらうか。子供を持つとすれば何人であるべきであらうか。職業と家庭生活と子供を持つこととを並立させることが出来るであらうか。結婚と職業を並立させれば、それぞれ別に銀行の通帳を持つべきであらうか。又女だけの友人仲間と女にのみ限られた興味とを持つべきであらうか。同じ職業に就く場合は、男子と同等の

資金を支払わなければならないか。男子と同様に立派な教育が与えられるべきであらうか。その教育内容は男子の教育内容と同じであるべきであらうか。女性は男性の知的匹敵者であらうか。凡ゆる人間活動の分野——法律、医学、銀行業務、政治、宗教等——女性に解放されるべきであらうか。又嬰兒を持つとすれば、授乳すべきであらうか或いは牛乳で育てるべきであらうか。働く婦人或いは職業婦人はその嬰兒を雇人に託してよいであらうか。婦人が子供を持たないため或いはその数を制限するため、避妊法を用いることは許されるであらうか。結婚しないで子供を持つた婦人達に対しては、如何なる態度をとるべきであらうか。子供達を如何に扱えばよいのであらうか。その躰は如何にすべきであらうか。

これらの問題ならびにその他無数の問題によつて、婦人は一つの問題であり、彼女の周囲の人々にとつて、大きな不安の源であることを知ることが出来る。しかしこれと同じ性質の質問は男子については、殆ど発せられたためしが無い。又一連の同じような質問が婦人にとつて当然な責任範囲である子供の現代教育に關しても、発せられているのである。現

在、子供達に対してなされていることの凡ではそのままで果してよいであろうか。子供の教育に関する疑義や疑問は横合いから見た現代女性の問題に外ならない。

更に女性の問題は出版界にも、大きな印象を与えていることが実証されている。これは数年前、アメリカでなされた調査であるが、ニューヨーク市立図書館の図書目録によると、「婦人」の題名の下に出版された単行本は一〇六二五冊、「子供」の題名で出版されたものは七七九六冊、「人間」の題名では二二三一冊、「男子」の題名では四四六冊になつてゐる。

この巨大な図書館の中枢的図書目録の組織は、婦人に対する一般的関心が量的に云つて、男子に比し廿四倍大きいことを示している。質的に云つても、女子に対する関心が遙かに大きいのは云うまでもない。婦人に対する著者の多くは婦人自身なのである。

他方、日本の現状を眺めても、兎角、婦人が問題の中心になつてゐる。家族制度復活に対する婦人達の反対運動を見てもわかるように、折角、憲法で保障された婦人の基本的人権は家族制度の中では認められない。結婚の自由も、妻の地位も、母の権利も、子供の人権も守られないからである。婦人職業種目の減少と婦人職場の縮少、約束された男女の本質的平等の破壊、打ちたてられた婦人の地位の逆もどり等々が問題とされ、ひいては戦後の民主化までが疑問とされているのである。さき頃日本に來たイギリス労働党のサマースキル女

史の態度が疑義を起したのも、正しい男女の關係は如何あるべきかが未解決のままになつてゐるからである。東京の婦人ばかりの会合に男子のカメラマンがいたといふので、彼女は彼らを口汚く室外に追いやり、「イギリスでは女子の会合に男子のカメラマンは入れない」と云つたといふことである。職業としてそこに働いている人間の性別を気にかけるのは男女同権の眞の意義を理解しないことであり、サマースキル女史の言つたことに対し、一齊に拍手を送つた婦人達の態度も、要するに男子に対する婦人の劣等感の故と解すべきだといふのである。

このように婦人が何処でも、又たえず問題にされるのは、何かもつと深いものが表面に現われたからではなからうか。即ち正しい男女の在り方が法律の上で樹立されただけで、もつと根本的な意味で解決されていないからではなからうか。何れにせよ、女性の問題はフランス革命以来、自由主義的民主主義の国々に於て、解決されるどころか、益々、緊急な問題になつてゐるのである。それを解決するための誤つた試みが却つて婦人問題の解決を困難にしてゐるとも云える。従つて今迄のところ、何も根本的な解決がなされたわけではなく、婦人のためになされたことは凡て表面的であつたと云わねばならぬ。

現代女性の根本問題と取組む前に、既に述べたような諸問題を投げかけるに至つた要因をたずねることにしよう。近代社会の機構が新しくなつたために、そこに見られる要因は何

であろうか。先ず産業革命と共に全社会機構は大変革を來した。家庭は最早、家族の働き場所ではなくなつた。彼らの関心は家族の一团によつてなされる協同生産から、職場を問はず何処でも営まれる労働が生み出すところの、個人の報酬へと移つてゐる。生産でなくて給料が家族の有する労働への主な関心になつて來た。住居と作業所の距離が古い様式の地域社会を破壊する主な要因であつた。こうなると、息子や息女はその伝統的の家業を継がず、彼らの社会に於ける地位やそれに結びつく価値は主として、家庭外で受けた教育に帰すべきものとなる。又技術社会は男子と相ならんで同じ作業をする可能性を、婦人に与えた。自然を征服するのが今迄、常に男子の任務であつた。ところが今日では、組織された世界の車をなめらかに廻転させるのに必要なきまりきつた仕事は、男と同様女もすることが出来る。労働者として社会に自分自身の場所を与えられると、婦人達は強力で、生産力を有する男子に保護される必要を感じない。国家が安全を保証するので、云わば、国家が抽象的超越的父として家長の代理をする。今日、家庭に於ける婦人労働の性質は大いに變化した。その分量は少なくなつていない。今迄、召使を雇つていた人々は今や、召使なしの生活を余儀なくされてゐる、しかも凡ゆる家庭の関心は非常に生産的な社会の圧力により、益々多くの財産、より高い生活水準へと向けられてゐる。標準の高い児童教育と家族単位の両親子供への縮少とは、一家

の中で一人の婦人に過重な荷を負わせることになる。家庭内の仕事は彼女独りでしなくてはならない。

多くの社会的任務は殆ど誰でも、即ち男でも女でもする事が出来るわけである。この事實は凡ての人間、即ち男と女の社会に於ける平等の価値と平等の権利を人々に一応、意識させるのに役立つ。しかしこの平等化の過程には危険が存するのであつて、労働と生活の条件は決して婦人の自由を保証しはしない。

今日、アジアやアフリカの多くの国々に於ては、国家主義が婦人解放の一要因だと云われている。国家主義運動は婦人の解放を、文明開化された国の一つの特長と見做してゐると云うことが出来る。我が国の場合、敗戦を契機として、婦人は男子と本質的に平等であることが約束されたのである。又これらの国々では、キリスト教が新しい社会の型をつくるのに一つの役割を演じてゐることも否めない。キリスト教は社会的変革を來たすのに陰に陽に力になつてゐる。キリスト者達が女子教育界を開拓したし、キリスト教的愛が婦人をして古い社会的慣習を打ち破らせ、看護とか社会奉仕等の職業に入らせた唯一の動機であつたのである。

以上に述べたこととは幾分、趣を異にして、現在、先進諸国に於ては、婦人達は最早、男子を模倣したいとは思わなくなつてゐるということである。又男子を模倣することを余儀なくされてゐない。男子と相ならんでの職業と離婚生活の

兩方で、女性的性格を現わしたいと願っている。婦人達は今一度、独特な女性的使命を意識するようになっていく。彼らはその社会的使命を意識するようになっていく。彼らはその社会的使命に関して、新しい意味の確信を得つつある。子供に面倒を見る母の機能の重要さと特異性は、戦争で母を奪われた多くの子供達を科学的に観察して、益々、強調されるようになった。母として、婦人は掛替のない貴重な存在である。

しかしこれと同じ程度の確信を妻としての役割に持つことが出来るであろうか。家事を営むだけで、夫の職業に少しも参与せず、唯だ、疲れて帰宅する夫を待つている妻は不足なき生活をしていると云うことが出来るであろうか。職業の上で夫の友となり、協力者としての交わりを欠いているため、その代償として子供を甘やかす気にならないであろうか。男子について云えば、現代社会は保護者と教育者の役割を彼から取上げてしまい、息子達に家業の手ほどきをする権利を奪い去ってしまった。社会が婦人の職業と技術を必要とするとの新しい意識の中に、婦人達は失われたもののある代償を持つているであろう。しかし男子にとつて、彼女のそれに匹敵する理合せがあるであろうか。

周知の如く、近代の諸科学は確かに人間に関する知識を拡大した。人間の問題や男女両性の関係につき、現存の又過去の状態を理解するには、科学の援助を求めねばならない。しかし科学は私共が最も切実に必要とするもの、この混迷した

時代にあつて女性問題を解決するため、神は私共に何を求めているか、神の意志は何であるかを見抜く力を与えはしない。従つて私共は今こそ、単なる社会構造や諸科学の分野でなくして、それら凡てのものが由つて来る根本問題に突き進まねばならぬ。

惰、凡ての知識の前提が信仰であるとすれば、男女が互に持つべき知識もそうだと云うことが出来る。誰かを知るためには、先ず彼が存在する事実を受け入れねばならない。しかも觀念としてでなくして、人間として、責任ある個人として、存在する事実を受け入れねばならぬ。婦人は真に男子の存在を受け入れていられるであろうか。かつて彼に従つたように、今日、批評もせず彼を模倣し、当然の事として彼を受け入れるとすれば、それは真面目に人間として彼を考へていないことになる。そうではなくして、彼を抽象的規範と見做すことになる。この場合、彼女の態度は信仰でなくて軽信である。婦人が人類の規範でないと同様、男子も人類の規範ではあり得ない。男女が共に人類を構成している。男女が相提携して発展しないならば、人類は沈滞してしまふであろう。婦人の解放にしても、婦人が男子との新しい心理関係を見出して初めて、真の意味と正しい方向を見出すわけである。男子は婦人の精神的発展なしには、より高いレベルの意識に浮び上ることは出来ないことを自覚すべきである。これは又婦人が文字通り、その特異性を發揮せねばならぬことを意味す

る。と云うのは今迄、外界のみならず内的生活に於ても、男子が彼女の抽象的規範になつて来たからである。潜在意識的に彼が彼女の魂と精神の独裁者であつた。この故に、今日見られるような心身の不安状態を社会にかもし出したのである。

ところが男子は婦人の存在を信じているであらうか。既にあるものの上に更に新しい型の婦人、新しい職業が加えられて、婦人達はなる程進歩した。しかし英国最初の女権論者が「女は死んでいる」という原則に挑戦して以来、女性は大いに交つたと云えない。一方的な男性心理が相交らすこの世界を支配している。男性の単なる存在によつて、女性の魂が真正に発現し、その能力が十分に發揮することが妨げられている。これはとりも直さず女性の存在そのものが真面目に要望されていないからである。女性はその特質と眞の才能を發揮することを抑圧されているからである。

人間にはそれ独特の方法で自己を表現せねばならぬ一種の力が潜んでいる。独自の表現方法が許されないと、自己の生命に対して尊敬の念を欠くようになり、常に復讐するものである。婦人がなす貢献は無名のものであつて、目立たぬ仕方

で家族や他の経路を通して社会を影響すると云われている。しかし著しく男性的なこの世界でそれが事実だとすれば、婦人の影響は今日、尙甚だ不足していると云わねばならぬ。近代国家に於ては、到る処で母性の尊さが叫ばれるが、生活不安、失業、原水爆問題等々が婦人達の日常の糧になつてい

る。婦人は単なる生産機械ではない。責任ある存在である。このような考えが男子に起らないのは、彼が婦人の存在を人間として少ししか信じていないからであらう。相互の存在についての婦人の側の軽信と男子の側の不信の態度が、男女の相互理解に最悪の条件をつくり出しているのである。

自分自身の運命——神意——を必死に求め、そのために男子の助力を必要とする婦人の發展に対して、男子が至つて無関心なのは、彼の第二の極である婦人の存在に対する男子の不信仰にその原因があると思われる。しかもその不信仰といふのは、男子が意識しない彼の一極性にあるのである。兎角、男子には女性の個性を破壊しようとする傾向がある。即ち女性は生れつき潜在意識又は超意識に導かれた生活をするものである。しかしそれは男性にとつて邪魔になるので、一方ではこれを抑圧しようとする。又他方では女性を単なる性的存在と決めてしまふ。このような態度によつて、男性は女性を軽視、又無視しようとするのである。

ゴットフリード・エーベルツは彼の「男性時代の興亡」と題する著書の中で、男子は人生を支配することによつて人生を理解する、その目的のために人生を分割する、「分割して征服する」Divide at imperaといふのが彼の本質であるといふ意味のことを云つているが、それは確かに尤もだと思われる。ところが婦人は人生の中に自分を投げ込むことによつて、人生を理解する。男性的原則の性格からすると、これら

の二つの原則は互いに排除しあうのである。それに反して女性的原則の性格からすると、これら二つの原則は互いによく補足し合うと思われる。しかし男子は彼が支配する術を知らぬものの存在を認めないので、婦人は彼を理解し彼と協力するために、彼の原則を自分のものとしなければならぬのである。彼女はその心理的柔軟性の故に、男性原理に従つて考えることが出来る。しかも男子は彼女自身の性質に従つて判断評価することが出来ない。そのため婦人は非常に頓挫失敗していると感じて大いに悩む。

男子の場合はその反対で、自分自身のもの以外の範疇を理解することが出来ないので、自分の範疇を規範として打ちたててそれを全世界に押しつけようとする。要するに男子が婦人を理解し得ない理由は、彼の中にある十分発達していない要素を軽視する点にある。彼が軽視し恐怖するのは、彼の潜在意識内にある女性的要素だと云うことが出来る。慣れた眼には、彼が婦人に関して有する意見によつて、男子の中にはそれらの要素の發展段階を直ちに認めることが出来るものである。「万一、女の働きに感謝の念、いたわりの気持が持てない男というものがいるなら、そんなものは男の数には入らない。男仲間の面汚しであり、そんな半端ものは世の中に生きてゐる必要はないだらう」と池田潔氏も云つてゐる。ここでは男性の解放こそが切実に望まれる。婦人に対する理解の幼稚さ、原始的態度は婦人の發展のみならず、男子自身の

發展にとつて由々しい障壁になつてゐる。それ故男子は婦人の發展に従つて、又男女が人間らしくなるためにも、自身自身を一変させる必要があるのである。

更に女性問題の根本的解決を求めて、人類の精神史上、男女平等について最も顕著な貢献をなしたと云われる。否、寧ろ現代の男女平等論の由つて来る根拠たとも云われるキリスト教の考え方を見て行こう。聖書全体が人類の創造と救済について語つてゐる。男女兩性の創造を最も明白に扱つてゐる部分に最近、新たな神学的関心が持たれるようになつた。創生記一章廿六節から廿七節までと同じく五章一節から三節までは、人類が神の像に創造された事実と男女兩性の創造の事実とが最も近い關係で述べられてゐる。「神その像の如くに人を創造たまへり即ち神の像の如くに之を造り之を男と女に創造たまへり」(創生記一の廿七)とある。人類が男女兩性に創造されたことと人間が神の像に創造されたこととの關係を如何に考えるべきであらうか。伝統的解釈によれば、人間即ち男は神の像に創造され、女は男の孤獨が見出された時、後の智慧として創造された。この解釈は女は人間存在の完全さに参加しなかつたという信仰に基づいたものであつた。コリント前書十一章七節には「男は神の像、神の榮光なれば、頭を被るべきにあらず、然れど女は男の榮光なり」とある。又協力者の概念も女性に関する伝統的解釈によるもので、創生記二章十八節には「神言ひたまひけるは人獨りなるは善か

らず我彼に適ふ助者を彼のために造らんと」ある。

男女両性の創造と神の像に創造されたこととの關係について、もう一つの説明は大体次のようである。神自身は孤独でなく、三位一体である。神に於ける人格の關係は愛の關係である。イエスは父の子に対する愛と子の父に対する愛について、たえず語つてゐる。「我は父にをり、父は我に居給ふなり」(ヨハネ伝十四の十一)であり、「父の我を愛し給ひし如く、我も汝らを愛したり、わが愛にをれ」(ヨハネ伝十五の九)である。凡ての愛の始りは神自身にある。神は人類、人間を神自信の像に創造する。神が孤独でない如く、人間も孤独で、自己十全であるべきでなく、神の像に創造されているのである。神は彼が創造した人間の心中に、單なる肉体的不完全より遙かに深い不完全性を深く植えつけたのである。且つ同時に愛の能力と必然性を置いたのである。人類最初の愛は男女両性の愛である。

又人間創造の物語は男女の機能の相異について語つてゐる。近代に至るまで、實は一八五〇年頃まで、掃箒から墓場までの女の世界は殆ど専ら家庭内にあり、男の仕事は自然界を探検し支配するにあると考えられて来た。このような男女間の分業は神の承認を得ていると思われた。しかし創生記一章の物語には、「生よ繁殖よ地に満盈よ之を服従せよ」(創生記一の廿八)とある通り、生殖する仕事も支配する仕事も共に男女に与えられている。男子と同様、婦人も社会的任務を

持つてゐる。男女に分化されており、そのためそれぞれがなすべき独自の貢献を持つことは、私的個人的生活に於けると同様、公的社会的生活に於ても重要ではなからうか。事實、旧約聖書時代にも婦人は地方、中央を問わず、公的生活で異彩を放つていたということである。従つて今日では、問題は婦人が社会的生活の中で役創を持つべきか如何でなくして、如何な場所を占め、彼女独自の才能を如何して用いるかということであらう。婦人が公的生活に入れば男子のような仕方でも男子の仕事をするべきだという婦人に対する要求から、独自の仕事即ち男子が興味を失うような職業、例えば社会奉仕の如き職業を婦人に割り当てる動きがある。更に男女は各々、相手の才能の感化を受けてなし得るような貢献をより大きなものになすべきだとも考えられる。これは恐らく詩や芸術の場合にあてはまるであらう。婦人の靈感なくしては存在し得ぬような芸術作品を、男子のみの故にすることがあり得ようか。この場合、男女各自の貢献は相手の貢献の中に全く統合されているのである。

最後に「神之を男と女に創造たまへり」にもらわれている創造の秩序と「今はエダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隸も地主もなく、男も女もなし、汝らは皆キリスト・イエスに在りて一体なり」(ガラテヤ書三の廿八)というパウロの言葉に現わされた救済の秩序との關係を如何考へるべきであらうか。聖書全体が人類の創造と救済について語つてゐると云われる。即ち人類の永遠の運命を証している。「人類」ということは「男と女」ということと同じである。「人類」とは、逃がれるこ

との出来ぬ結びつきの中で、男と女である以外には何も意味しないのである。換言すれば、人類とは二つの別々な型の間が加算されて出来上つてゐるのでもなければ、二つの性が存在するのは、ある以前の仮定された全体の二つの部分になることでもない。「人類」ということは「統一と男女」と同時に云ふことを意味する。二位一体 ダイ・ユニテ Di.unity という言葉は二者のうちの何れか一方のみが人類の根本的な真理ではないような仕方に関係しあうことであつて、多様と統一の概念を同時に現わしている。人類は男女が二つであり、一体である時、より完全な人間であり得るのである。

神が人間を彼の像に創造し、これを男女につくつたことは、神が男女を相異なつた価値ではなくて、相互に依存する異なつた種類の価値、相互補足を意味する種類の異なつた価値を持つた男と女を創造したことを意味する。相異なつた自然の運命と共に、男女は人間として、互いに交わりに向かう存在として、人格として、相異なつた特質機能を与えられてゐる。兩者は人格、即ち責任ある人間であるためには、同じ程度でしかし違つた仕方で愛し、交わり、結びあつて生きるように要求されている。独りでないように創造されてゐる。若し男と女であることが神の像を宿すことであるならば、男と女であることは人類の永遠の運命を担うことである。ブルネル博士の言葉で云えば「男は生産者、指導者であり、女は受容的で生命を保護する。新しいものをつくるのが男の任務であり、つくられたものを結合し、それを既に存在するものに適応させるのが女の義務である。男は外に出かけて、大地を彼に従わせるが、女は内を見、かくれた統一を守る。男

は客観的に総体的に論ずるが、女は主観的に具体的に個別的に論ずる。男が建て、女が飾る、男は征服し、女は奉仕する。男は頭脳で凡てを理解するが、女は精魂を凡てにしみ込ませる。計劃し支配するのが男の任務であるが、理解し結びあわせるのは女の任務である。」

これらの男女の特質には、ある意味で上下の秩序があるにしても、それは純粹に機能的な相異であつて、価値の相異ではない。男に「適う助者」はこの世では従属的、依存的、且つ重要でない人間を意味するが、本来、そのようなことは意図されていない。コリント前書九章三節では、女は幾分、低く評価されていることは否定出来ないが、これら表現は聖書がまとうている当時の衣服であつて、これは時代と共に消えて行く要素である。殊にガラテヤ書三章廿八節の主において、男も女もなしという真理によつて、そのようなこの世の上下の秩序は全く打ち消されてしまふ。又聖書では、男の側の指導的機能は單なる支配でなくして、奉仕を意味する。それは凡ての支配を断念して、僕として行動するより神に招かれることである。人生の意義として愛が認められるところでは、僕となることは屈辱でなくて、寧ろ特権である。

斯の様に「事かえられる為にあらず、反つて事かえるため」に來た者にあつては、凡ての価値は轉換してしまふのである。神にとつては、男も女も凡てが人間であり、神の呼びかけに応答すべき、等しく大切な人格なのである。現代の凡ゆる婦人問題も、この根源的な男女二位・一体の立場から解決されるべきものと信ずる。